

## 四旬節第5主日の説教

ホセ・ゴンザレス 神父 2010年3月21日(日)

### 《哀れみとゆるし》

「ただいま。」日本に帰りました。

太田に来ていろいろな思い出が沢山出てきます。今日ミサと一緒に出来てとってもうれしい事です。太田に行こうと思い金神父様に電話で連絡をとったら「どうぞ、どうぞ、みんなが、待っています。」と言って下さりありがたく感じました。そしてこの3月21日は10年前日本に来た日で、4年前メキシコに戻った日です。この春の日は私の日かなと思っています。その春の話を今日はしたいと思いません。しかし日本語をメキシコにいた時少し忘れてしまいましたので、用意した説教の原稿を読みます。

今日は春の日です。今日から新しい季節に入りますので自然の風物も新しくなります。今まで地の中に死にしそうな花の種、木の種がこれから出てくるのです。新しい季節、新しい木、新しい花、新しい命が始まるのはとても嬉しいことだと思います。新しい命が始まることによって不安になることもあるのですが、これからその新たな命を楽しめるのはとてもいいことでしょう。

今日の福音(ヨハネ 8・1-11)では限りもない神の愛、神の哀れみによって新しい命が始まる人々がよく見えることが出来るでしょう。特に姦通の女のことです。しかし、姦通の女の出来事は紛争な状態の中で行われます。イエスの哀れみは律法学者たちやファリサイ派の人たちに眉をひそめます。罪を許すことがその人々は許されなく、律法を守るべきであったからで、イエスの福音宣教のやり方を非難しました。しかしイエスはどのように赦すべきであるかと教えていたでしょう。

その許しの動きは

- 1 .・まず自分の犯した罪を認める。
- 2 .・その罪を赦される。
- 3 .・そして他人に罪を赦すべき。

ですから他人を許す人は神様から許されるものになります。しかし律法学者やファリサイ派の人々がイエスを試して、訴える口実を得るために、こう言いました「先生、この女は姦通をしているときにつかまりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の仲で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか。」難しい立場でしょう。イエスの前に律法学者の人たちだけいるわけではなく、民衆の皆がいると福音から聞きました。

ですからここで、イエスは教えることによって、姦通の女と、イエスの将来を決めることになることと疑えない出来事です。律法によれば姦通の女は石で打ち殺せるべきです。イエスは簡単な立場にいません、とても微妙な立場に立っておられます。敵と行動を共にすれば罪人に対して非難することになってしまい、今まで哀れんできたことが止めて偽造な先生になるわけです。しかし、何もしなければ律法を無駄にしてしまうので、モーセの律法から離れてしまって偽造な先生もなくなってしまいます。どうすればいいのかとイエス様は考えていたでしょう、そうではないと思います。彼

らは何を願っているのをよく考えてもらいたいとイエスは考えていたかもしれません。

律法学者やファリサイ派人たちがしつこく問い続けています。イエス様から早く答えてもらいたいのです。彼らはとても頭がいいとアピールしたいという理由でプレッシャがかかっているのでしょうか、あるいは、早くそんな女を裁きたいのでしょうか。そうではないかもしれません。彼らがしたいのはイエスを迫害したいからです。イエスは民の先生になったからです。イエスが教えていることを皆が信じてきたからです。しかし、イエスは慌てずに自分の時間をとりながら、その出来事を受け入れこんでいます。というのは姦通の女を大事にしたいのですが、律法学者やファリサイ派の人たちや、民衆の皆さんにも大事にしたいからです。すばらしいイエス様でしょう。迫害されても、皆を愛したいです。

ですから、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」とイエス様は言われました。

その時、皆が大沈黙したでしょう。こんな新しい教えは今までしていなかったでしょうとすべての人々は恥じ入って、石のある手が下ろして、立ち去ってしまったでしょう。今まで彼らは他人の罪について考えていたでしょう。しかし自分の犯した罪についてそうしなかったでしょう。ですからイエス様は「姦通の女のように、あなたたちも神様から哀れみと許しが必要であると教えたかったと思います。

この世では、どんな人でも、パパ様、司教達、神父など信徒を含めって神様の哀れんでいただくことが必要です。この出来事によって律法学者やファリサイ派や民衆の皆は自分のことについて反省して、罪びとは皆であるので一人また一人、立ち去ってしまったのです。自分の犯した罪を認めました。イエス様と出会うことがそのようになると思います。皆がいなくなってしまうとイエスひとりと真ん中にいた女が残りました。これから、神様の愛によって新しい命が始まることが見えてきます。イエスひとりと女、二人だけ残って素晴らしい一瞬になったじゃないかと思います。

今まで死にしそうな種が新しい芽を出始めます。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか」女が「主よ、だれも」と言うとイエスは言われた「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはなりません」。

素晴らしい、限りのない神の愛、神の許し、髪の哀れみがよく現せます。あの女は神様の哀れみの体験が出来ましたが民衆の皆も出来なのではないでしょうか。

兄弟姉妹の皆さん、私たちはこの出来事を聞いて考えて黙想してから、誰の立場と似ている立場にいるのでしょうか。『イエスから愛された女の立場か』『民衆の皆の立場か』『律法学者、ファリサイ派』の立場か』それともイエスの立場ですか。

どちらにしても四旬節というのは神様の哀れみを体験出来る特別な期間です。ですから復活祭を祝うことが出来るように自分の犯した罪を認め、イエスから許され、罪を犯さないように恵みを受け、他人を裁けずに神様の哀れみと愛のうちに生きていくなら、私たちも新しい季節、春と共にイエスと共に新しい命を始まる事が出来るでしょう。